

平成26年度 学校評価

1.はじめに

平成26年度は、学校創立30周年であり、記念誌の作成及び式典を行った。4月からの取り組みであり、教職員一丸となり実施することができた。今までの歴史を振り返る良い機会となった。

実習病院では実習を心よく引き受けて頂いており、本当に感謝の言葉に尽きる。卒業生の数も2000名を超え、医療・福祉の場で貢献できていることを実感することができた。

平成30年には、菊名校との統合が決まり、平成28年度から開始される教育内容の検討をしていった。教育内容の検討は、通常業務を行いながらであり、教員の業務量の増加に繋がっていることは否めない。一方、これまでの教育評価を生かした内容の検討であり、よりよい教育内容の構築になっていると考える。

2.学校評価の視点

学校評価は、教育評価の一環であり、定期的に学校の現状を点検し、評価する。これにより改善点を明確化し、教職員が一体となって改善目標に向かって活動し続けることである。

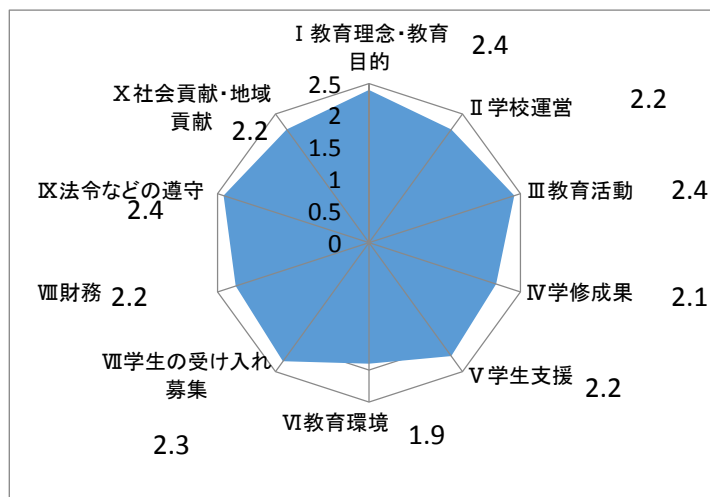
内容として次の視点で実施する。

- 1)学校評価(アンケートによる)
- 2)目標設定に対する評価
- 3)クラス運営評価
- 4)実習評価
- 5)授業評価
- 6)各科カリキュラム評価

なお、授業評価については各科で行い、領域別に総括したものを載せたい。

3.評価

1)学校評価



I 教育理念・教育目的	2.4
II 学校運営	2.2
III 教育活動	2.4
IV 学修成果	2.1
V 学生支援	2.2
VI 教育環境	1.9
VII 学生の受け入れ募集	2.3
VIII 財務	2.2
IX 法令などの遵守	2.4
X 社会貢献・地域貢献	2.2

今年度の評価アンケートは、10のカテゴリーを作成し、61項目の質問を設定した。

教育理念・教育目標については、2.4(80%)これに沿った教育の実践が行われているといえる。教育理念の「和顔愛語」「知行目足」が生かされた教育内容を構築している。実際の場面では、行事等の際、学生の言葉の中に反映されている。

学校運営については、2.2(73%)であり、計画的に取り組んでいる。また、平成30年に統合していくことを踏まえ、創設に向けて検討会がもたれている。教育課程の検討会等にも教員が参加し、今後の学校運営の方向性を理解できていると考えられる。

教育活動については、2.4(80%)であり、教育内容の充実に努力している事が伺える。このカテゴリーの中で、低い値は、外部評価の導入と人事交流(教員)であった。外部評価は、今後検討していく必要がある。また、人事交流は、統合するあたり教員の交流を勧めていくことが必要であろう。人事交流は、臨床の場とも必要である。ユニケーションシステムを推し進めていくようにしたい。

学修成果については、2.1(70%)であった。点数の低い項目は、卒業生への支援についてである。現在は、卒業生へのフォローアップを行っておらず、今後他校で実施している・夏休みなどを活用した「卒業生と語る会」などの開催などを計画していったとよいと考える。

教育環境の項目が1.9(63%)であり、最も低い値となっている。学内外の実習施設における十分な教育体制の整備がややできていないと思われる。

特に病院の行っているインターシップなどの参加を学生に積極的に勧めていくことなどが必要であろう。また、病院との連携を深めていくことで、教育環境の整備に繋げていきたい。

学生の受け入れ募集については、2.3(76%)であった。26年度の入学試験の応募が減少しており、その対策を入試委員を中心に検討している。高校卒業する新卒者の応募をいかにして維持していくか。指定校推薦入試における指定校の選定も検討の余地がある。

財務については、2.2(73%)であり、横浜市、神奈川県などからの補助金についてはしっかりと管理されていると考えられる。実習費の高騰など今後教材費・実習費等の負担増に対して学費の検討が必要であろう。

法令等の厳守は、2.4(80%)であり高得点となった。厚生労働省の管轄であり、法に即した教育が行われていると考えられる。

社会貢献は、2.2(73%)であった。学生のボランティアについての紹介を学生に随時行っている。教員自らが社会貢献となると時間的制約があるが、地域ケアプラザのボランティアなどに参加を勧めている。

全体の評価として、2.2(73%)であり、学校の運営としては妥当であると判断できる。しかし、これからは学生への支援をどのようにしていくか、教職員を含め考えていきたいと思う。学校が横浜市への貢献をひとつの指針として持っており、卒業生が横浜市内への就業を勧めていくことが不可欠であり、職業教育としての目標を達成していけるようにしていきたい。

2)目標に対しての評価

1. 国家試験100%を目指しましょう。

第104回国家試験は、第一看護学科37名、第二看護学科が35名が受験した。その結果、一科1名、合格二科2名が不合格となった。学校全体の合格率は、95.5%であった。不合格者について支援体制の強化が課題である。どのような指導をしていくか、具体的ななかかわりを今後検討していくこととする。

2. 教員としてのキャリアアップを目指していきましょう。

大学院に通学する教員にフレックスタイムを導入することができた。教員が学んでいける環境づくりの一環として評価できる。

26年度に実施された研修会は、22か所、延88名が参加している。主催は、神奈川県看護協会や連絡協議会などである。費用は、無料のことが多く、教員の参加を次年度さらに多くしていきたい。参加したメンバーをみると、決まった教員である傾向がある。研修会のお知らせは、回覧や会議の席で紹介しているが、積極的に参加してもらうための伝達方法を検討していきたい。

教員が自分の成長を実感できるように、ポートフォリオなどの方法も検討していきたい。また、キャリアアップについて面接を通して確認していくことも必要であろう。

3. 組織の一員としての自覚と役割を認識して、仕事に取り組みましょう。

教員との面接において、次のような事柄を捉えることができた。

- ①十分な意見交換ができず、仕事に対する意欲が低下している。
- ②特定な教員に配慮があるが、仕事の内容と量に不公平がある。
- ③計画的に仕事をしていくことや、時間の有効活用が難しい

これらの事を踏まえ、平等性を重視した仕事の分担が必要であろう。これを各科主任に伝え、年度初めには調整の必要を見極めていけるようにする。さらに役割を見直し、教員が自分ひとりで問題を抱え込まないようにしていきたい。

4. 倫理観に基づく教育実践をしていきましょう。

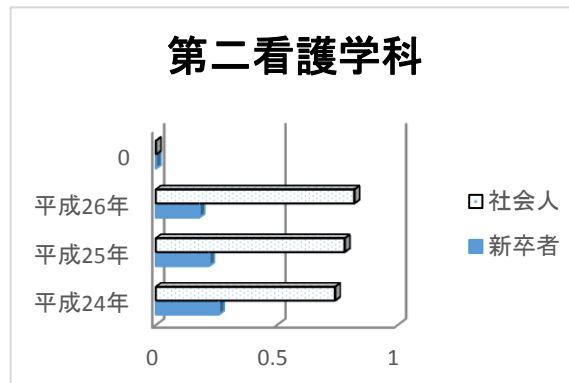
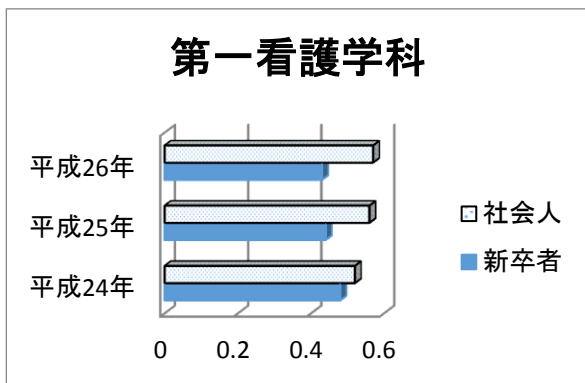
倫理的態度をもって学生の指導に取り組めるよう、科内の会議等で話し合うことができた。指導の経過をふりかえりよりよい学生との関係を形成できる努力ができた。

看護師としての倫理的態度を学生に身につけていけるような指導を工夫していきたい。

検討を勧めている『倫理規定』を作成し、教員一同周知していきたい。

3)その他の資料より

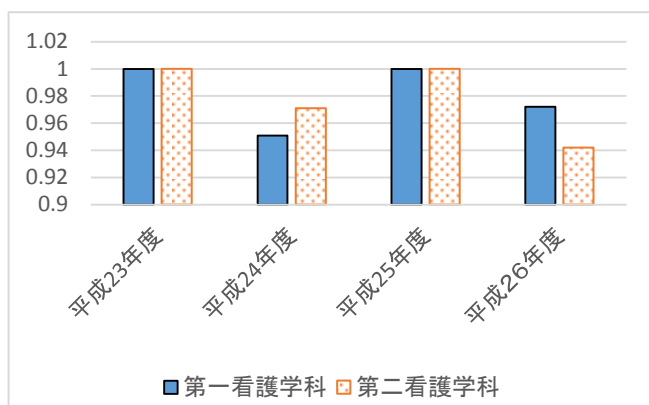
①入学者の背景



第一看護学科は、新卒者と既卒者がほぼ半数ずつである。これは、推薦入試を実施しているおり、高校からのストレート入学者がいるためと思われる。新卒者には、学習の仕方や学習を計画的に行っていけるようなきめ細かい指導をしていきたい。

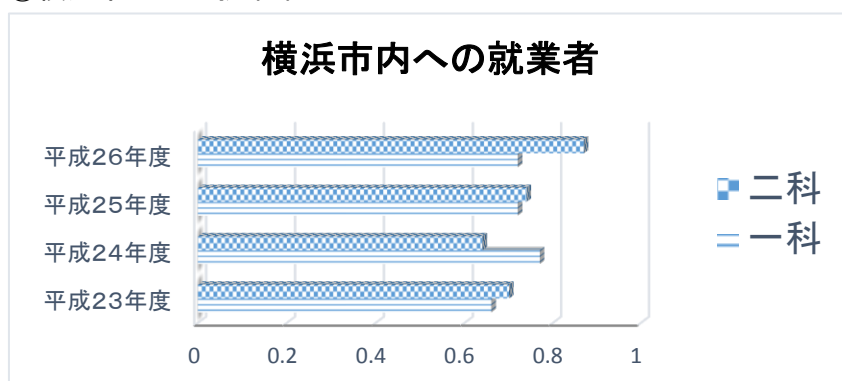
第二看護学科は、80%が既卒者であり学生の平均年齢が20歳後半となっている。各科学生の背景に沿った教育内容の工夫、学習環境の調整への指導が必要であろう。

②国家試験の合格率



ここ4年間をみると、100%であった年の翌年には不合格者を出している。学生・教員共に気持ちの緩みが出てきているとも考えられる。不合格者の状況の分析を行い、国家試験対策に活かしていく。さらに、次年度の受験に際しては、学校の支援を段階的・計画的に行っていくかの計画が必要である。

③横浜市内への就業率



横浜市内への就業は、年々増加している。実習病院への就業が多くなっていることが要因であると思える。このためには、臨地実習での学生の良い体験が必須であり、教員各自も就職に繋げていくような指導を継続していきけるようにしたい。

4.まとめ

平成26年度の評価をもとに次年度への取り組みを挙げていきたい。

①受験生の増加への取り組み

入学試験の日程・受験科目の検討、高等学校への宣伝、募集要項の早期作成

②退学者を減らしていける指導内容の検討

③国家試験100%合格・指導内容の検討

④教員のスキルアップ

研修会への参加、仕事の効率化を図る、学会での発表、目標管理(主任面接等)

⑤地域との連携

ボランティアの勧め、クリーアップ大作戦、

⑥統合に向けての準備を滞りなくしていく。

⑦学生と教員との信頼関係の構築

⑧実習病院との関係をよりよく保ち、学習環境の向上を目指す。